

【原著】

大学生の喫煙状況および喫煙関連因子の検討

柴田和彦¹⁾ 石崎唯太¹⁾ 日山豪也¹⁾ 渡部翔太¹⁾ 吉村文香¹⁾ 竹田将人¹⁾ 難波弘行¹⁾

要 旨

背景と目的：大学生の喫煙率は、入学後、学年が上がる毎に上昇することが知られている。そのため大学は、入学後に喫煙を開始させないための対策をとる必要がある。それにより将来の生活習慣病のリスクも低減することができる。本研究では喫煙防止教育及び禁煙支援対策に必要な情報を得るため、松山大学で実施した「学生生活実態調査」のデータを用い、喫煙状況、喫煙に関連する要因そして喫煙に対する意識について解析を行った。

対象と方法：調査対象は、松山大学学部生5713名である。得られたデータの中から喫煙状況、大学生生活、アルバイト、そして課外活動に関する設問項目等を解析対象とした。

結果：本学学生の全体の喫煙率は、9.8%であり、男性は14.9%、女性は3.4%であった。学生の健康白書2010では、4年制の学生の喫煙率は男子9.10%、女子2.06%と報告されており、本学における喫煙者は全体より高い値となった。生活属性に関する項目で、アルバイトを常時行っている学生や課外活動(クラブ活動、サークル活動、ボランティア)に積極的に参加している学生は、喫煙率が有意に高かった。生活習慣の面では、朝食を食べない、就寝時間が遅いなど規則正しい生活ができていない学生では喫煙率が有意に高かった。また、学生生活での悩みや不安を誰に相談するかとの設問では、先輩や友人が最も多かった。更に、薬物に対して寛容な学生ほど喫煙率が高かった。

結論：学生が入学後に喫煙を開始しないようにするためにはタバコを含めた依存性薬物についての正しい知識を提供する必要がある。併せて、課外活動での禁煙化を進める必要がある。さらに学内禁煙化も今後の検討課題である。

今後は、入学時での防煙教育のみならず、継続的な教育指導が必要と思われた。それにより学生の意識も変えていくことが極めて重要である。

キーワード：大学生、喫煙率、生活習慣、薬物依存

緒 言

近年、成人の喫煙率は徐々に低下傾向であり、2015年の厚生労働省の調査において、喫煙率は19.3%(男性32.2%、女性8.2%)であった¹⁾。しかし、その中でも特に喫煙率が高い年代が男性では30代の44%、50代の

41.5%、40代の39.5%であった。女性では20代の12.7%、40代の12.4%、30代の12.0%と男女ともに20代、30代の喫煙率が他の年代と比較して高い傾向にある。このような親となる年代の喫煙は親自身の健康問題の他に、子どもへの受動喫煙による健康被害や喫煙習慣の誘発などが問題となる。

また、大半が20代である大学生の喫煙については、入

1) 松山大学薬学部臨床薬学教育研究センター

責任者連絡先：柴田和彦
(〒790-8578)愛媛県松山市文京町4番地2
松山大学薬学部臨床薬学教育研究センター
医薬情報解析学研究室
TEL：089-926-7238、FAX：089-926-7162
E-Mail：kshibata@g.matsuyama-u.ac.jp

学時はほとんどが未成年者であるが学年が上がるとともに喫煙率が上昇することが報告されている²⁾³⁾。若年者は成人よりもニコチン依存症に陥りやすく、18歳未満で喫煙を開始するとニコチン依存度が高くなることが報告されている⁴⁾⁵⁾。そのため大学として入学後に喫煙を開始させないための対策を行うことは極めて重要である。大学の社会的責務として大学生の喫煙状況、喫煙行動の背景について把握し、喫煙防止及び禁煙支援対策の課題を明確にすることが必要となる。

松山大学（以下、本学）においても学生の喫煙問題に取り組んでおり、受動喫煙を防止するため平成22年の3月には分煙喫煙所がつけられた。また、平成27年度より、薬学部教員による新入生対象の喫煙についての講習会を実施している。しかし、喫煙所の外で喫煙する学生はいまだに見受けられ、喫煙マナーも問題となっている。そこで本研究では喫煙防止教育及び禁煙支援対策に必要な情報を得るため、本学学生の喫煙状況、喫煙に関連する要因について検討を行った。

対象と方法

本研究では、本学で定期的実施している「学生生活実態調査」のデータを利用した。対象は、本学学部生5713名を対象とし、調査期間は、2014年11月11日～28日の間に、無記名方式で回答を求め、紙媒体で配布・回収を行った。この調査は、本学学生の学生生活の実態を把握し、教学環境の改善を図るための基礎資料として活用することを目的として実施された。調査内容は、「一般社団法人 日本私立大学連盟」が2014年度に実施した「第14回学生生活実態調査」の内容に準じた調査項目とし、総計62項目（設問数93）で実施された。

【解析対象項目について】

本研究では、以下の項目を解析対象とした。

- (1) 基本属性：年齢、性別、学部学科、学年
- (2) 喫煙状況：喫煙の有無
- (3) 生活属性：就労（アルバイト）状況、課外活動（クラブ、サークル活動）状況、食事（朝食）、就寝時間
- (4) 学生生活での不安や悩みについての相談相手
- (5) 薬物使用に対する意識について

【統計解析】

統計処理は、統計解析ソフト（JMPver9.0、SAS Institute Japan）を用いた。対象者の属性、喫煙行動の背景について、喫煙者、非喫煙者で χ^2 検定及び残差分析を行い、有意水準は、0.05未満とした。

【倫理的配慮】

本研究は、無記名（匿名）によるアンケート調査で個人が特定できないように配慮して回収および処理されている。

結果

1. 基本属性

今回の調査では4117名からアンケートを回収することができ、回収率は全学生の72.1%で、比較的高い回収率であったと考えられる（表1）。

表1-1 解析対象者の背景(学部)

学部	全体	男性	女性
経済学部経済学科	1294	891	403
経営学部経営学科	1036	523	513
人文学部英語英米文学科	207	60	147
人文学部社会学科	422	179	243
法学部法学科	672	430	242
薬学部医療薬学科	485	221	264
未回答	1	0	1
総回答者数	4117	2304	1813

表1-2 解析対象者の背景(年齢)

年齢	全体	男性	女性
18歳未満	17	15	2
18歳	642	335	307
19歳	1070	616	454
20歳	923	506	417
21歳	825	472	353
22歳	431	248	183
23歳	104	49	55
24歳	39	23	16
25歳	23	12	11
26~29歳	26	16	10
30歳代	10	7	3
40歳代	2	1	1
50歳代	1	1	0
未回答	4	3	1
総回答者数	4117	2304	1813

2. 喫煙状況

1) 全体

表2は、学生全体の喫煙状況(喫煙者、非喫煙者)を示している。本学の喫煙者の割合は全体で9.8%であった。

2) 性別

表3は性別で集計した結果である。男性の喫煙率は14.9%、女性は3.4%であった。残差分析により、男性の喫煙者が女性の喫煙者よりも有意に多かった。

3) 学部別

表4および図1は、学部別の喫煙状況を示している。残差分析により、経済学部経済学科と法学部法学科の喫煙率は、11.9%と12.1%であり、他学部よりも喫煙者の割合が有意に多かった。

表2 喫煙状況

	全体	割合(%)
現在、喫煙していない	3703	89.9
現在、喫煙している	403	9.8
未回答	11	0.3
総回答者数	4117	

表3 性別での喫煙状況

性別	喫煙者 (n=403) (%)	非喫煙者 (n=3703) (%)	p値 (χ^2 検定)
男性 (n=2297)	342 [※] (14.9)	1955 [＃] (85.1)	p<0.001
女性 (n=1809)	61 [＃] (3.4)	1748 [※] (96.6)	

無記入回答を除き統計処理を行った。()内は無記入回答を除いた数に対する割合

※：残差分析により、他よりも頻度が有意に多い
 ＃：残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

表4 学部別の喫煙状況

学部	喫煙者 (n=403)	非喫煙者 (n=3703)	p値 (χ^2 検定)
経済学部経済学科 (n=1288)	153 [※]	1135 [＃]	p<0.001
経営学部経営学科 (n=1036)	93	943	
人文学部英語英米 文学科(n=206)	11 [＃]	195 [※]	
人文学科社会学科 (n=421)	25 [＃]	396 [※]	
法学部法学科 (n=671)	81 [※]	590	
薬学部医療薬学科 (n=484)	40	444	

無記入回答を除き統計処理を行った

※：残差分析により、他よりも頻度が有意に多い
 ＃：残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

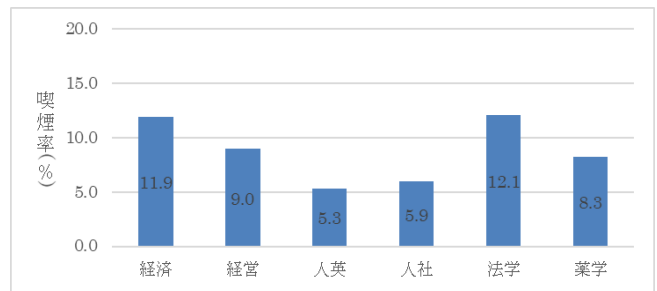


図1 喫煙状況(学部別)

表5 学年別の喫煙状況

学年	喫煙者 (n=403)	非喫煙者 (n=3711)	p値 (χ^2 検定)
1年 (n=1177)	42 [＃]	1135 [※]	p<0.001
2年 (n=1048)	105	943	
3年 (n=965)	128 [※]	837 [＃]	
4年 (n=756)	112 [※]	644 [＃]	
5年 (n=79)	7	72	
6年 (n=69)	6	63	
7年以上 (n=20)	3	17	

無記入回答を除き総計処理を行った

※：残差分析により、他よりも頻度が有意に多い

＃：残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

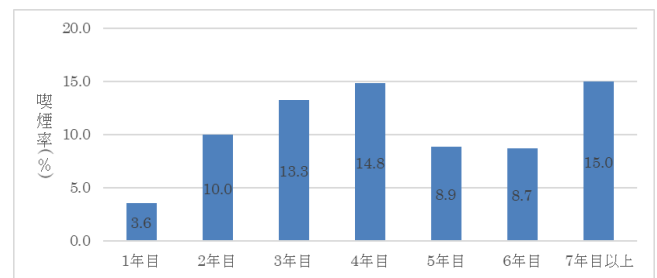


図2 喫煙状況(学年別)

4) 学年別

学年別の喫煙状況を表5および図2に示した。1年から4年までは学年が上がるに従い喫煙者が増加していた。また、残差分析により喫煙者の割合は3,4年生で有意に多かった。

3. 生活属性と喫煙状況との関連について

1) 就労状況との関連

就労(アルバイト)に関する質問ごとの対象者の喫煙状況を集計した。その結果、アルバイトの状況により喫煙率が有意に異なっていた(表6)。残差分析により、喫煙率は、現在アルバイトをしていない学生より、アルバイトを常時している学生の方が有意に多かった。

表6 学部別での喫煙状況

アルバイト	喫煙者 (n=403)	非喫煙者 (n=3703)	p値 (χ^2 検定)
常時している (n=1732)	198*	1534#	p<0.001
時々している (n=1293)	141	1152	
定職をもっている (n=98)	11	87	
これからしようと思 っている(n=641)	28#	613*	
しようと思わない (n=276)	17#	259*	

無記入回答を除き総計処理を行った

※: 残差分析により、他よりも頻度が有意に多い

#: 残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

表7 学部別での喫煙状況

課外活動	喫煙者 (n=388)	非喫煙者 (n=3525)	p値 (χ^2 検定)
積極的に参加してい る(n=1459)	169*	1290#	p<0.01
参加しているが熱心 でない(n=657)	47#	610*	
参加しているが活動 していない(n=300)	36	264	
参加していたがやめ た(n=521)	47	474	
最初から参加してい ない(n=976)	89	887	

無記入回答を除き総計処理を行った

※: 残差分析により、他よりも頻度が有意に多い

#: 残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

表8 学部別での喫煙状況

食事(朝食)	喫煙者 (n=403)	非喫煙者 (n=3704)	p値 (χ^2 検定)
毎日とる(n=1659)	80#	1579*	p<0.001
時々とる(n=1751)	215*	1536#	
とらない(n=697)	108*	589#	

無記入回答を除き総計処理を行った

※: 残差分析により、他よりも頻度が有意に多い

#: 残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

表9 学部別での喫煙状況

	喫煙者 (n=404)	非喫煙者 (n=3676)	p値 (χ^2 検定)
21時まで(n=50)	8	42	p<0.001
22時まで(n=60)	18*	42#	
23時まで(n=195)	17	178	
24時まで(n=700)	43#	657*	
1時まで(n=1333)	94#	1239*	
2時まで(n=1194)	139*	1055#	
3時まで(n=383)	57*	326#	
3時以降(n=165)	28*	137#	

無記入回答を除き総計処理を行った

※: 残差分析により、他よりも頻度が有意に多い

#: 残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

2) 課外活動との関連

表7は課外活動(クラブ、サークル活動、ボランティア)に関する質問での喫煙状況を集計し、 χ^2 検定と残差分析の結果を示した。その結果、課外活動の取り組み状況により喫煙率に有意差が見られた。喫煙者は、課外活動にあまり熱心でない学生より、積極的に参加している学生の方が有意に多かった。

3) 食事(朝食)との関連

表8は朝食に関する質問ごとの喫煙状況を集計している。その結果、食事(朝食)を規則正しくとるかで喫煙率に有意差が見られた。残差分析による頻度の差では、喫煙者は、朝食を規則正しくとる学生よりも時々とる学生やとらない学生の方が有意に多かった。

4) 就寝時間との関連

表9は、就寝時間に関する集計結果をまとめたものである。その結果、就寝時間別で喫煙率に有意差が見られた。残差分析による頻度の差では、喫煙率は、24時から1時まで寝る人よりも2時から3時以降に寝る人の方が有意に多かった。

4. 学生生活での不安や悩みは誰に相談するか

「不安・悩みの相談相手として誰に相談するか。または相談しようとするか。主な相談相手を二つまで選んでください」という質問項目の結果と喫煙状況について解析した。

調査結果では、全体として不安や悩みの相談相手として、特に多かったのは、友人(60.7%)と家族(39.7%)で、その次に多かったのが、先輩(10.8%)であった(図3)。

さらに、 χ^2 検定と残差分析により、喫煙者は、先輩に相談する人の方が家族や友人に相談する人より、有意に多かった(表10)。

5. 薬物使用に対する意識との関連について

表11は、薬物使用に関する質問項目ごとの喫煙状況を示している。絶対に使うべきではないという喫煙者は有意に少なかった。また、1度くらいなら使ってもいいと思っている喫煙者の割合は、有意に多かった。

考 察

厚生労働省の2015(平成27年)年度の国民健康栄養調査によると、20代の現在習慣的に喫煙している者の割合は、性別では、男性30.6%、女性6.7%であり、男女ともに10年間で減少傾向にある⁶⁾。

表 1 0 悩みの相談相手と喫煙状況

	喫煙者	非喫煙者	p値 (χ^2 検定)
家族(n=1634)	135 [#]	1499 [*]	p<0.01
友人(n=2500)	231	2269	
先輩(n=446)	68 [*]	378 [#]	
大学の教職員 (n=142)	18	124	
学生相談室(n=48)	5	43	
医師(n=46)	6	40	
出身校の教師 (n=49)	5	44	
その他(n=277)	29	248	
誰にも相談しない (n=561)	54	507	

無記入回答を除き総計処理を行った

※：残差分析により、他よりも頻度が有意に多い

#:残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

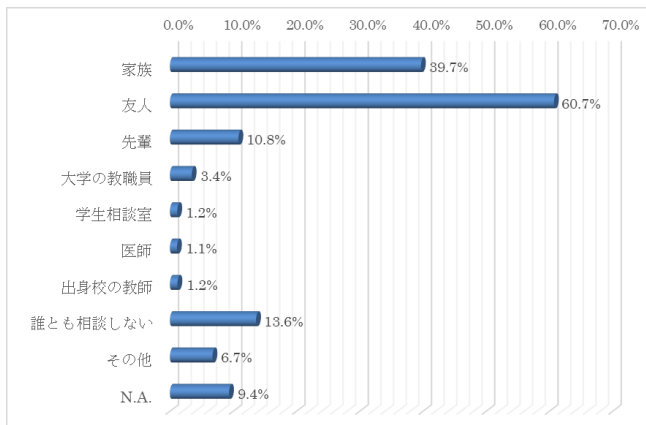


図3 不安・悩みを誰に相談するか

表 1 1 薬物使用に対する意識と喫煙状況について

	喫煙者 (n=399)	非喫煙者 (n=3543)	p値 (χ^2 検定)
絶対に使うべきではない(n=3484)	333 [#]	3151 [*]	p<0.001
1度くらいなら使ってもいいと思う(n=67)	19 [*]	48 [#]	
使うかどうかは本人の自由である(n=262)	29	233	
その他(n=129)	18	111	

記入回答を除き総計処理を行った

※：残差分析により、他よりも頻度が有意に多い

#:残差分析により、他よりも頻度が有意に少ない

また、学生の健康白書2010⁷⁾では、4年制の学生の喫煙率は男子9.10%、女子2.06%と報告されている。一方、本学学生の全体の喫煙率は、9.8%であり、男性は14.9%、女性は3.4%であった。この結果は、健康白書の喫煙率よりも高かった。これは、本学では、まだキャンパス内全面禁煙を実施しておらず、分煙となっていることが関係している可能性がある。

学部別の喫煙率では、経済学部経済学科と法学部法学科が他学部と比較して、有意に高い結果となった。その要因としては、経済学部と法学部は男性の割合が高く、全体の喫煙率では男性が有意に高いため、それに伴い喫煙率が高くなったことが推察される。

学年別での喫煙率では、学年が上がるにつれて喫煙率が上昇しており、以前の報告と一致する結果となった²⁻³⁾。特に3、4学年が多くなった要因としては、法的に喫煙可能な年齢に達し、友人や先輩から勧められて喫煙し始めることが推測される。先行研究において、このように周囲の喫煙者の存在によって、より喫煙を受容する意識が強化されることが報告されている⁸⁾。

生活属性との関連について検討した結果、アルバイトや課外活動と喫煙率との関係では、いずれも積極的に行っている学生において、その喫煙率が高かった。アルバイトや部活の先輩、友人、同僚など、周りに喫煙者がいることは、学生が喫煙者となる要因のひとつであるとの報告があり⁹⁻¹³⁾、喫煙率の上昇に繋がった可能性が考えられる。そのため、喫煙を防止するためには、大学の禁煙指導だけでなく学生を取り巻く地域社会の喫煙に対する意識を変えていく必要があると考えられる。

生活習慣との関連について、朝食を規則正しく食べているかとの質問では、喫煙者の方が非喫煙者よりも朝食を食べない割合が高く、きちんと毎日とっている学生は20%ほどであった。

また、就寝時間については、総務省統計局の平成23年度社会生活基本調査によると20代での平均就寝時間は、24時07分～24時57分であった¹⁴⁾。本学の調査結果では、24時から午前2時までが最も多く、就寝時間は平均と比べて少し遅い結果となった。喫煙者の就寝時間は、午前1時以降に有意に多く、時間が遅くなるにつれて増加傾向にあり、非喫煙者よりも就寝時間が遅い学生が多い結果となった。調査対象数が少ないため、因果関係は明確ではないが、今回の調査結果から喫煙は少なからず生活習慣

に影響を与えている可能性が推察された。また、ニコチンが有する覚醒作用¹⁵⁾により喫煙者の就寝時間に影響が出ている可能性もある。

実際、生活習慣と喫煙状況の関連についてはいくつかの報告があり、喫煙者は一般的に望ましくない生活習慣をより多く身につけているといわれている¹⁶⁻¹⁹⁾。曾我部らは、本研究と同様に喫煙者は、非喫煙者に比べ朝食欠食者が多く、食事時間も決まっていないものが多いと報告している²⁰⁾。

また、学生生活での悩み・不安を誰に相談するかとの質問において、喫煙学生、非喫煙学生ともに多くの学生が家族、友人そして先輩に相談していた。特に喫煙学生は、非喫煙学生より先輩や友人に相談する割合が他より有意に多い結果となった。相談相手として先輩、友人が多いことから、前述したアルバイトや課外活動での結果と同様に身近な存在の影響は大きいと思われる。

以上の事から、未喫煙者が喫煙行動を選択する際、タバコに対する意識に対して、更に強い影響を与える要因が関与した可能性が示唆された。それは、大学やアルバイト先の喫煙環境、周囲の喫煙者の存在という「環境」であると考えられた。

先行研究において、大学敷地内禁煙化により、大学生の喫煙率が低下することが報告されている²¹⁻²⁴⁾。そのため今後の対策としては、敷地内禁煙化によって喫煙者との接触機会を減らすことがひとつの方法であると考えられる。

以前の報告においても学生が喫煙を開始するきっかけは「興味がある」と「(先輩・友人に)薦められたから」が大きな要因といわれている²⁵⁻²⁶⁾。また、学生間でも部活やサークルなど幅広い学年が集まる飲み会などの禁煙化を行うなどして、新しい喫煙者を出さないように工夫していくことが重要である。また、ごく親しい友人や恋人が吸っている場合、一方で交際相手が喫煙することについて、本人が喫煙者であっても否定的な意見が多いとの報告もある⁹⁾。そのため禁煙支援においては、親しい友人なども積極的に関わるのが重要と思われる。

しかしながら、アルバイト等などのキャンパス外での喫煙行動に対する介入は困難である。従って、敷地内禁煙化のみでは学生への喫煙行動の抑止には繋がらない可能性がある。そのため、今後は現在の1年次での講習会に加えて、2～3年次においても継続的な禁煙教育を実

施することが重要であると考えられる。

一方、喫煙と薬物に対する意識との関連について、喫煙者の方が薬物に対する意識が寛容であることが推察される。タバコは薬物依存症として「Gateway drug」、薬物の登竜門的な位置づけとなっている²⁷⁾。今回の結果は、喫煙はその関連病だけでなく、違法薬物へ進行する可能性があるドラッグとして危険な存在であることを学生に伝える必要性を示すものである。さらに非喫煙者も含めて全体の8%が「一度ぐらいなら構わないと思う」「使うかどうかは個人の自由であり、使っても構わないと思う」と回答した結果は、あらためてタバコを含めた薬物依存の知識を伝える必要があると思われた。

最後に、本研究の限界として、横断研究のため有意な関連があったとしても因果関係を明確に証明したわけではない。今後は、同様の調査を複数年実施することにより、現在実施している新入生への講習会の教育効果についても検証する必要がある。

以上の結果から、タバコを含めた薬物依存の認知度を上げるための教育や対策、そして、タバコに対する知識とその先に続く薬物依存症を知ることは学生にとって極めて重要であると考えられる。それにより、周囲のタバコや薬物に対する許容や容認の姿勢も変化していくのではないかと考えられる。

併せて、今回の解析結果を大学当局へ提示し、大学全体として学生の健康管理の観点から、敷地内禁煙化へ向けた実施委員会等の立ち上げを要望したいと考える。

結 語

本学学生の喫煙状況と生活属性との関連性について検討した。その結果喫煙者と非喫煙者を比較すると、以下の点が明らかになった。

- (1) アルバイトを常時行っている学生や課外活動(クラブ活動、サークル活動、ボランティア)に積極的に参加している学生の方が、喫煙率が高かった。
- (2) 生活習慣の面では、朝食を食べない、就寝時間が遅いなど不規則な生活をしている学生では喫煙率が高かった。
- (3) 薬物に対して寛容な学生ほど喫煙率が高かった。

以上の結果から、学生が入学後に喫煙を開始しないようにするためにはタバコを含めた依存性薬物についての正しい知識を提供する必要性が強く示唆された。併せて、課外活動での禁煙化も進める必要があり、さらに学内禁煙化も今後の検討課題である。

参考文献

- 1) 厚生労働省編：平成25年度 国民健康・栄養調査報告、P213
- 2) 川崎詔子、高橋裕子：健康増進法制定後6年間の大学生の禁煙状況の変化について。禁煙科学 6(10)、2012：1-10
- 3) 八杉倫、西山緑、大石賢二：医療系大学における習慣的喫煙者と非喫煙者のライフスタイルとタバコに対する意識調査の検討：Dokkyo Journal of Medical Science 34(3)、2007：221-229
- 4) Grimshaw GM, Stanton A: Tobacco cessation interventions for young people. in Cochrane Db Syst Rev 2006.
- 5) DiFranza JR, Savageau JA, Rigotti NA, et al: Development of symptoms of tobacco dependence in youths : 30 month follow up data from the DANDY study. Tob Control 11,2002:228-235.
- 6) 厚生労働省編、：平成27年度 国民健康・栄養調査 結果の概要、P31
- 7) 国立大学法人保健管理施設協議会編：学生の健康白書2010、P104
- 8) 北田雅子、天貝賢二、大浦麻絵：喫煙未経験者の‘加濃式社会的ニコチン依存度 (KTSND)’ならびに喫煙規制に対する意識が将来の喫煙行動に与える影響—大学生を対象とした追跡調査より—。日本禁煙学会雑誌 6(6)、2011：98-106.
- 9) 原田隆之、笹川智子、高橋稔：大学生の喫煙支持要因の検討。日本禁煙学会雑誌 9(2)、2014：22-28
- 10) 東福寺幾夫、北爪晴香、小林博美：学生の喫煙に与える周囲の喫煙の影響について。禁煙科学 8(4)、2014：6-8
- 11) 阿部道生、佐藤英文、後藤仁敏、その他：鶴見大学学生、および教職員の喫煙の実態および喫煙に対する意識調査—2006年から2011年度調査のまとめ—。鶴見大学紀要 49、2012：109-116
- 12) 漆坂真弓、高梨信吾、阿部緑、その他：弘前大学学部生の喫煙状況と喫煙に対する意識調査。日本禁煙学会雑誌 5(4)、2010：111-119
- 13) 森本泰子、山口孝子、宮川明宏、その他：大学生への意識調査を通じた喫煙防止教育のあり方に関する一考察。教育開発センタージャーナル 第6号、2015：37-50.
- 14) 総務省統計局編：平成23年度 社会生活基本調査結果の概要、P41
- 15) Knott VJ, Venables PH: EEG alpha correlates of non-smokers, smokers, smoking, and smoking deprivation. Psychophysiology 14, 1977: 150-156.
- 16) 栗岡成人、北田雅子、吉井千春、その他：女子学生のタバコに対する意識と生活習慣は関係するか？—加濃式社会的ニコチン依存度調査票による分析—。日本禁煙学会雑誌 4(2)、2009：33-44.
- 17) 中村こず枝：喫煙受容度の評価と生活属性が与える影響—加濃式社会的ニコチン依存度調査票 (KTSND) を用いて—。岐阜市立女子短期大学研究紀要 63, 2013：37-42.
- 18) 保屋野美智子、白石好、塩原アキヨ、その他：女子学生の喫煙と食習慣との係わり。栄養学雑誌 61、2003：371 - 381
- 19) 尾崎米厚：青少年の喫煙行動、関連要因、および対策。J,Natl.Inst.Public Healch 54(4)、2005：284-289
- 20) 曾我部夏子、丸山里枝子、佐藤和人、その他：男子学生における喫煙と食生活状況および食生活に対する意識との関連性について。日本公衆衛生雑誌 55(1)、2008：30-36.
- 21) 中島素子、三浦克之、森河裕子、その他：大学の敷地内禁煙実施による医学生の喫煙率と喫煙に対する意識への影響。日本公衆衛生雑誌 55、2008：647-654.
- 22) Hahn EJ, Rayens MK, Rindner SL, et al: Smoke-free laws and smoking and drinking among college students. J Community Health 35, 2010: 503-511.
- 23) 小牧宏一、鈴木幸子、吉田由紀、その他：大学における5年間の敷地内全面禁煙化が喫煙率に与える効果。日本禁煙学会雑誌 4、2010：1-5.
- 24) 久根木康子、田中由紀子、高山昌子、その他：キャンパス内分煙と喫煙率の推移。慶應保健研究 25(1)、2007：89-93,
- 25) 飯高生子1, 阿部竜一1, 井上垂美1, 鶴見大学における喫煙の実態および意識調査X. 鶴見歯学 37(2)、2011：97-98.
- 26) 飯高生子, 杵渕恵那, 阿部竜一：鶴見大学における喫煙の実態および意識調査IV. 鶴見歯学 36(2)、2010：110-111.
- 27) 稲本 望、タバコとその先にある「危険ドラッグ、違法薬物」。日本禁煙学会雑誌 10(2)、2015：20-21.

A study on status and related factors of smoking among university students

Abstract

Objectives:This study aimed to clarify the smoking status and attitudes towards smoking in undergraduate students of Matsuyama University and provide suggestions for education on smoking prevention education and no-smoking advocacy.

Methods:“Survey on Student life” was performed to 5,713 undergraduate students. The survey included questions on personal attributes, smoking status, college life, part-time jobs, extracurricular activity and attitudes towards smoking.

Results:In all, 9.8% of all respondents smoked, and the percentage of smokers among men and women was 14.9% and 3.4%, respectively.

Students who constantly engage in part-time jobs and those who actively participate in extracurricular activities (club activities, circle activity and volunteering) had significantly high smoking rate. Regarding lifestyle, students who went to bed late and those who skipped breakfast had high smoking rates. Moreover, students who spoke about anxiety and troubles of student life with a senior had significantly higher smoking rates. Students who tends to accept drugs had significantly high smoking rate.

Conclusion:In order to prevent student to begin smoking after entering university, the study results revealed that we should education on anaclitic drug including cigarettes. Moreover, smoking cessation should be promoted during extracurricular activities. Not only to freshmen but also repeated education to all students is considered important to change and maintain attitude of students toward to smoking.